第 164 回東邦医学会例会　予稿集

令和 6 年 6 月 17 日(月)

A.　大学院生研究発表

1.　**黄斑円孔の手術前後における網膜感度について**

吉川 彬子（高次機能制御系眼科学）
指導教授：堀 裕一（眼科学講座）

微小視野計（MP-3,NIDEK）を用いて黄斑円孔の手術前後における網膜感度を測定した。術前は中心窩より 2 度以内の網膜感度の低下を認め、術後は 3 ヶ月の時点で網膜感度の有意な改善を認めた（$p<0.01$）が、術後 3 ヶ月から 12 ヶ月では有意な改善は認めなかった($p>0.4$)。また、術前の網膜感度は術前の黄斑円孔径、円孔底径、logMAR 視力と負の相関を示した（$-0.80<r<-0.48, p<0.05$）。MP-3 による網膜感度測定は黄斑円孔の手術前後の視機能評価に有用である。

2.　**心不全患者における右脚ブロックと再入院リスクの検討**

佐野 隆英（代謝機能制御系循環器内科学）
指導教授：池田 隆徳（内科学講座循環器内科学分野）

心電図検査における RBBB の存在は健常者において良性の所見とされており、経過観察とされることが多い。しかし近年、海外において心血管疾患を有する患者の RBBB の存在は全死亡を増加させると相次いで報告されているが、本邦からの報告は未だない。今回我々は、当科に心不全で入院した患者を後ろ向きに解析し、RBBB の意義について検討した。その結果、RBBB は主要有害心血管イベント($p=0.019$)に加え心不全再入院($p=0.032$)を有意に増加させた。

3.　**特発性黄斑円孔における歪視に関連する因子の検討**
術前後の視機能と網膜移動量について

塚原 瞬（高次機能制御系眼科学）
指導教授：石田 政弘（眼科学講座）

OCTA(optical coherence tomography angiography)により黄斑部の血管構造の撮影がより鮮明に行えるようになったため、特発性黄斑円孔における術前後の歪視に関連する因子、視機能と網膜移動量について検討した。黄斑円孔術後の円孔閉鎖には黄斑近方の網膜移動が大きく関連し、円孔径が大きいほど、術後大きく歪視が残存することが示唆された。

B.　プロジェクト研究報告

4.　**ESBL 産生菌菌血症に対する初期治療による臨床的有効性及び有効性予測因子の検討**

前田 正（総合診療科）

ESBL に対し初期治療薬として抗菌活性のない抗菌薬が投与された症例でも改善を認める症例を経験する。カルバペネム系抗菌薬等の広域抗菌薬の経験的治療が予後の改善に繋がるのか及び ESBL 菌血症の予後因子を検討した。大森病院で血液培養から ESBL が検出された症例を対象とし適切な初期抗菌薬が投与された群とそうでない群での有効性の比較を X2 検定で ESBL 菌血症の予後予測因子検討についてはロジスティック回帰分析を行い報告する

5. **膠芽腫に対する Olig2 を標的とした分子標的治療の基礎的研究**

平井　希（脳神経外科学講座(大橋)）

膠芽腫は高い治療抵抗性を示す非常に予後不良な原発性悪性脳腫瘍である。本研究ではグリオーマ幹細胞において治療抵抗性の重要な因子である Olig2 に注目した。Olig2 が高発現しているヒトグリオーマ幹細胞で Olig2 をノックダウンすると増殖能が低下し CDK2 をノックダウンすると Olig2 のリン酸化が抑制された。薬剤スクリーニングを行った結果、HSP90 の阻害薬である HSP990 により CDK2 活性が抑制されその結果、Olig2 リン酸化を阻害する効果を示すものと推測された。

6. **ALS における脳 MRI ネットワーク解析を用いた微細構造変化の検出**

花城 里依（神経内科）

ALS は主に皮質脊髄路を含む上位・下位運動性ニューロンの障害が出現する進行性の神経変性疾患である。本研究では、ALS 早期診断ツールの開発を目指し、細胞外自由水を定量化し、その影響を従来の DTI から除去可能な Free-water imaging（FWI）を用いて ALS の白質神経微細構造を評価した。結果、FWI は ALS に伴う大脳白質変性の定量評価に有用であることを示した。

C. 医学研究科推進研究報告

7. **裸眼立体視ディスプレイを用いた三次元 CT の呼吸器外科手術への応用**

佐野 厚　教授（外科学講座呼吸器外科学分野　佐倉病院）

3DCG 生成ソフトウェアの Viewtify®はゲームエンジンの Unreal Engine を用いて開発された高速に高品質な 3DCG を作成でき、裸眼立体視ディスプレイにも対応しており、裸眼で 3DCG 画像を参照・編集することができる。本研究では呼吸器外科手術に応用することを目標として Viewtify を導入し、胸部 CT の三次元解析を行った。まずは気管気管支の症例の画像を三次元とし、気管気管支の部位を解析した。次の段階として肺動脈や肺静脈の三次元画像解析を予定している。

D. 研修医発表

8. **顔面紅斑から丹毒の診断となった一例**

小松 明輝子（研修医）
指導：小松 史哉（総合診療内科）

丹毒は真皮を中心とするびまん性の細菌感染症である。主に A 群溶血性レンサ球菌による感染症であり、他の B,C,G 群の溶連菌や黄色ブドウ球菌などでも同様の症状を呈する。丹毒では真皮が病変のため顔面紅斑が耳介と連続して波及するミリアンズイヤーサインを認めるが、一方で、丹毒と鑑別が必要である蜂窩織炎には認めないため大変有用な身体所見である。今回は、ミリアンズイヤーサインを認めた一例を報告する。

E.　大学院生研究発表

9.　**ST 上昇型心筋梗塞患者における Index of Microcirculatory Resistance を用いた冠微小循環障害の経時的評価**

平野 正二郎（代謝機能制御系循環器内科学）
指導教授：池田 隆徳（内科学講座循環器内科学分野）

心筋梗塞患者に対して経皮的冠動脈形成術を行い冠血流改善後に心筋リモデリングを認める症例がみられるが、それらに対する冠微小循環障害の評価は確立されていない。本研究では、ST 上昇型心筋梗塞患者における冠微小循環障害の変化を Index of Microcirculatory Resistance を用いて評価することとした。心筋梗塞発症 1 週間後と 6 か月後に冠微小循環障害を評価しそれらの予測因子に関して比較検討を行うこととした。

10.　**123I-BMIPP 心筋シンチグラフィーにおける各種パラメーターと心血管イベントの関連性**

坪野 雅一（代謝機能制御系循環器内科学）
指導教授：池田 隆徳（内科学講座循環器内科学分野）

虚血性心疾患を中心に当科では 123I-BMIPP 心筋シンチグラフィーを施行している。今回、虚血性心疾患を発症後に 123I-BMIPP 心筋シンチグラフィーを施行した患者を検討した。123I-BMIPP 心筋シンチグラフィーにおける各種パラメーターと、その後の心血管イベントの関連を研究したところ wash out rate の低い群で心血管イベントの新規発症、再燃が多いことが確認された。その他考察も含めて発表する。

11.　**異所性蒙古斑の治療におけるナノ秒レーザーとピコ秒レーザーの比較検討**

髙山 桃子（高次機能制御系形成外科学）
指導教授：荻野 晶弘（形成外科学講座）

異所性蒙古斑の治療は、レーザー照射が推奨されており、主にナノ秒レーザーが用いられている。近年、より短パルス幅のピコ秒レーザー機器が発売され、有効性・安全性についての報告が散見されるが、ナノ秒レーザーとの優劣は十分な議論がなされていない。今回、両者による異所性蒙古斑の治療効果・合併症の有無について評価し、比較検討した。

F.　プロジェクト研究報告

12.　**医学教育学を学びながら考えた問い ～医学生の学習意欲が変化する要因とその効果の分析～**

柳橋 優（東邦大学医学部内科学講座・神経内科学分野(大森)）

医療現場では、課題、問いに対して必ずしも答えが存在するとは限らない場合があり、そのような状況でも、次ら問題点を抽出し、優先順位を考えて解決していくことが求められる。

この医師となって以降も、自ら問題点を抽出し解決法を見つけ出していくことができる背景には、学ぶことに対する意欲が関与しているのではないかと考えており、このような思考に至った経緯と学習に関して考察する。

13. **外科系急性感染症における自動多項目同時遺伝子検出システムの有用性に関する検討**

渡邉 隆太郎（東邦大学医療センター大橋病院外科学講座）

穿孔性腹膜炎や腹腔内膿瘍などの外科領域急性腹部感染症は致死的となる. 2019 年 4 月から同年 12 月までに経験した外科領域急性腹部感染症における膿汁・腹水 11 例を対象に，全自動遺伝子検査システムを使用し評価した．11 検体の培養結果と Filmarray による解析との一致率は 50-100%で、中央値 66.7%であった。Filmarray で検出可能な菌種に限定した場合の一致率中央値は 100%であった。本システムは次世代の起因菌同定法となる可能性が示唆された.

令和 6 年 6 月 18 日（火）

I. 大学院生研究発表

16. **天疱瘡の疾患活動性評価におけるビーズアッセイ法の有用性**

濱中 美希（生体応答系皮膚科学）
指導教授：石河 晃（皮膚科学講座）

天疱瘡の自己抗体がその標的である接着分子デスモグレイン/デスモコリンの分子間結合を阻害する能力を定量する目的で、接着分子を表面にコートしたビーズが分子間結合により凝集する系に対して患者血清を添加する方法（ビーズアッセイ法）で血清の接着阻害活性を測定し、複数症例について検討した。その結果、ビーズアッセイ法を用いて評価した接着阻害活性は天疱瘡の疾患活動性と有意に相関があるという結果が得られた。

17. **リウマチ性疾患患者におけるデノスマブの長期投与の有用性**

古川 果林（生体応答系膠原病内科学）
指導教授：南木 敏宏（内科学講座膠原病学分野）

抗 RANKL 抗体のデノスマブ(Dmab)のリウマチ性疾患(RD)患者における長期投与の有用性について検討した。Dmab を最大で 7 年間使用した 165 例の RD 患者を後ろ向きに解析した。Dmab 投与 7 年後の腰椎骨密度、3 年後の大腿骨頸部骨密度で有意な増加を認めた（$p < 0.05$）。Dmab の継続率は 72%で、顎骨壊死 2 例、新規骨折 9 例を認めた。RD 患者における Dmab 長期投与の有用性が示された。

18. **特発性間質性肺炎における全身性強皮症自己抗体の意義**

村上 悠（代謝機能制御系糖尿病・代謝・内分泌学）
指導教授：齋木 厚人（内科学講座糖尿病・代謝・内分泌学分野）

特発性間質性肺炎（IIP）患者は全身性強皮症（SSc）の診断基準を満たさなくても全身性強皮症特異的自己抗体（SSc-Ab）が陽性となることがしばしばある。今回、我々は IIP における SSc-Ab の各サブタイプと臨床的背景、予後、急性増悪（AE）との関連を検討した。解析の結果、SSc-Ab の有無により生存期間および AE 発生率に有意差は認められなかった。また SSc-Ab のうち抗フィブリラリン抗体が有意な AE のリスク因子であることが示された。

J.　大学院生研究発表

19.　**双胎間輸血症候群を発症した双胎妊娠における母体循環動態の検討**

小瀧 曜（代謝機能制御系産科・婦人科学）
指導教授：中田 雅彦（産科婦人科学講座）

双胎間輸血症候群(TTTS)の母体循環への影響は明らかでないため、正常単胎妊娠(単胎群)、正常一絨毛膜二羊膜双胎妊娠(nMD 群)、TTTS 発症例(TTTS 群)に分け母体循環動態を検討した。TTTS 群は、nMD 群に比較し左室の拡張末期及び収縮末期容積は有意に小さく(p=0.001)、左室駆出率は有意に高かった(p=0.001)。TTTS 群と単胎群間に有意差はなかった。心拍出量(CO)は 3 群とも同等であった。TTTS 合併例では、CO を保つために母体の心機能が適応していることが示唆された。

20.　**指尖脈波から測定した妊婦の自律神経機能**

島袋 麻希子（代謝機能制御系産科・婦人科学）
指導教授：中田 雅彦（産科婦人科学講座）

妊娠経過に伴い交感神経機能は亢進し、副交感神経機能は低下する。従来の心電図の心拍変動による測定ではなく、指尖脈波を用いて簡便に、妊婦の自律神経機能を評価した。妊娠期に交感神経が活性化する一方、副交感神経の活性が低下するという、先行研究と同様の結果をより簡便な測定方法で得ることができた。今後、自律神経機能測定を臨床現場に導入することを容易にし、周産期合併症の予測ツールとして使用できる可能性がある。

21.　**高齢者胃癌の臨床病理学的特徴**

小椰 地洋（代謝機能制御系臨床腫瘍学）
指導教授：島田 英昭（臨床腫瘍学講座）

従来の報告では高齢者胃癌の大部分は 90 歳未満であり、90 歳以上の症例に関する詳細な報告は少ない。年齢分布や性別の明確な記載がないので、90 歳以上の集団での臨床病理学的特徴は不明であった。90 歳胃癌手術症例は、単独施設での症例数が少数であることから、南東京地区 10 施設の共同で 85 歳以上の高齢者胃癌手術症例を解析して、85 歳から 89 歳症例と 90 歳以上症例との臨床病理学的比較検討、予後解析を行い結果報告する。

K.　プロジェクト研究報告

22.　**Cefazolin inoculum effect を示す MSSA による菌血症の臨床的予後に関する検討**

佐藤 高広（総合診療・急病センター）

近年、MSSA の中に、高接種菌量の微量液体希釈法法により CEZ の MIC 値が著明に増加する株の存在が明らかとなっている。当院の血液培養陽性 100 株中のうち 16 株(16%)が高い MIC となったが、30 日死亡率(19% vs 35%)、7 日以内の血液培養陰性化率(75% vs 69%)、カテーテル関連血流感染症の割合(38% vs 46%)などに有意差は認めなかった。

L.　研修医発表

23.　**嘔吐から特徴的な症状で診断できた大麻過嘔吐症候群の１例**

岩本 敦雅（研修医）
指導：鹿嶋 直康（総合診療内科）

大麻過嘔吐症候群は 2004 年に初めて報告されているが、日本での報告例はない。昨今、薬物が蔓延している日本でも今後同様の症例が増加していく可能性もあり貴重な 1 例を経験したので報告する。症例は 29 歳、男性、主訴は嘔吐。嘔気、嘔吐を繰り返し、水分摂取も困難となり救急搬送された。当初は急性胃腸炎と診断し対症療法を行っていたが改善しなかった。易怒性、頻回のシャワーの使用という特徴があり、尿検査で THC 陽性を認めた。

24.　**腹痛、下痢で受診した劇症型溶血性連鎖球菌感染症の一例**

安部 美咲（研修医）
指導：繁田 知之（総合診療内科）

症例は 50 代男性。腹痛、発熱、水様性下痢、乏尿を主訴に受診し細菌性腸炎による腎前性腎障害が疑われ抗生剤投与と補液が開始された。入院後、全身状態増悪して敗血症性ショックを呈し、血液培養検査にて溶血性連鎖球菌が検出されたことから劇症型溶血性連鎖球感染症の診断に至った。救命センターにて人工呼吸器、補助循環装置、血液透析等の集中治療を行うも急激な経過を辿り第 3 病日に死亡した症例を経験したため報告する。

M.　研修医発表

25.　**髄膜炎の１例　～身体所見や治療方針の復習をしながら～**

玉田 健人（研修医）
指導：鹿嶋 直康（総合診療内科）

総合診療科研修中に経験した頭痛が主訴の患者様に対し、身体診察・検査所見から無菌性髄膜炎を疑い、アシクロビルの予防投与を行って奏効した 1 例。診断までの流れとアシクロビル投与開始からの治療経過について発表する。また髄膜炎の疫学・治療法について、身体診察の際に行った髄膜刺激徴候の感度・特異度について再度検討した。

26.　**四肢の疼痛から好酸球性多発血管炎性肉芽腫症の診断に至った一例**

金 理志（研修医）
指導：繁田 知之（総合診療内科）

症例は 54 歳女性。来院 1 ヶ月前から両下肢痛が徐々に増悪し発熱も伴うようになった。その後疼痛は上肢にも認めるようになり、血液検査で MPO-ANCA 陽性で、頭部 CT 検査にて既往にある副鼻腔炎の増大や左肩 MRI 検査で筋肉内にびまん性に線状の脂肪抑制 T2 強調画像高信号が認められ好酸球性多発血管炎性肉芽腫症の診断となった。若干の文献的考察を加え報告する。

27. **腹部膨満感で受診した原発不明がんの一例**

一久保 美音（研修医）
指導：繁田 知之（総合診療内科）

症例は 70 代男性。腹部膨満感を主訴に受診し腹水を認めたため、腹腔穿刺を施行し癌性腹膜炎の診断となった。その後各種検査を行うも原発巣は特定できず、原発不明癌の診断に至った。徐々に performance status の低下および腎障害の進行を認め、best supportive care の方針となった。
原発不明がんの文献的考察を踏まえて報告する。

令和 6 年 6 月 19 日（水）

P. プロジェクト研究報告

30. **長期 androgen 受容体阻害による double negative 去勢抵抗性前立腺癌（CRPC）の誘導と Tgf シグナル阻害による誘導抑制機構**

堀 俊介（生理学講座細胞生理学分野，泌尿器科学講座）

前立腺癌に対する androgen 受容体（AR）シグナル阻害効果は一時的で、やがて耐性（去勢抵抗性前立腺癌）が出現する。我々は AR シグナル阻害条件下で前立腺癌細胞の長期培養を行うことで、AR シグナル阻害耐性と Tgfb シグナル反応性が出現することを見出した。AR シグナル阻害薬に加えて、Tgfb シグナル阻害薬を併用することで、AR シグナル阻害に対する耐性獲得を抑制できることを見出した。

31. **薬剤感受性検査による β-lactamase の機能分類法の構築に関する研究**

小森 光二（東邦大学 医学部 微生物・感染症学講座）

本研究では、薬剤感受性検査を用いて容易に β-lactamase の表現型(宿主株にもたらす薬剤感受性)を明確にできる手法を構築することを目的とした。代表的な β-lactamase 遺伝子を薬剤選択圧なしで大腸菌に維持される pMiniF-1 発現ベクターにクローニングし、大腸菌 DH5α-Δ*ampC* を形質転換した。微量液体希釈法により形質転換体に対する β-lactam 系薬の最小発育阻止濃度を測定した。大腸菌 DH5α-Δ*ampC* と pMiniF-1 の組合せにより、薬剤感受性検査による各種 β-lactamase の表現型解析が可能であると考えられた。

Q. 柴田洋子奨学助成金受賞講演

32. **Lewis glycosphingolipids as critical determinants of TRAIL sensitivity in cancer cells.**

森脇 健太（医学部生化学講座生化学分野）

細胞傷害性リンパ球などに発現する TRAIL は、がん細胞に細胞死を引き起こし、腫瘍免疫監視機構の一翼を担う。また、TRAIL 受容体はがん治療の分子標的として期待されている。本研究において我々は、がん細胞表面のルイス糖脂質が TRAIL 誘導性がん細胞死を亢進させることを見出し、ルイス糖鎖ががん細胞の TRAIL 感受性を予測する分子マーカーとなる可能性を示した。

R.　分科会報告

33.　**【心臓の会】**
温故知新　-アミオダロンの使い方-

小池 秀樹（内科学講座循環器内科学分野）

難治性不整脈の治療において抗不整脈薬アミオダロンは、その多様な作用機序と臨床効果により、循環器および不整脈専門医にとって必須の薬剤とされている。しかし一般診療においては、副作用や作用機序の複雑さから敬遠される傾向にある。本稿ではアミオダロンの特徴を説明するとともに、使用感や薬剤のイメージを掴むために安全かつ適切な使用法について解説した。

34.　**【第 16 回 東邦医学会佐倉内科分科会】**
モストグラフが病勢の把握に有用であった高度肥満気管支喘息患者の 1 例

秋山 菜々子（東邦大学医療センター佐倉病院研修医）

54 歳女性。気管支喘息で外来通院中、2 年間持続する弛張熱と SpO_2 88%の呼吸不全、喘鳴の精査目的に入院した。BMI35.0kg/m^2、採血検査、画像検査、呼吸機能検査から高度肥満を背景とした非 2 型炎症を伴う難治性気管支喘息が疑われた。入院管理下に 800kcal/日のカロリー制限を行い、呼吸不全、喘鳴、モストグラフ上の気道抵抗が経時的に改善した。肥満患者の減量は気道抵抗を低下させ、気管支喘息を改善させる可能性が示唆された。

T.　プロジェクト研究報告

36.　**Caspase-8 の T 細胞における非酵素的機能の役割の解明**

関 崇生（生化学講座・生化学分野）

Caspase-8 のプロテアーゼドメインを欠損する *Casp8*$^{D/D}$ マウスは、ネクロプトーシスの亢進により胎生致死となる。ネクロプトーシスの実行因子である Ripk3 を欠損した *Ripk3*$^{-/-}$マウスと交配すると、*Casp8*$^{D/D}$;*Ripk3*$^{-/-}$マウスは生存可能となる。私達は *Casp8*$^{D/D}$;*Ripk3*$^{-/-}$マウスの CD8T+細胞が過剰に活性化しサイトカイン産生する新たな知見について報告する。

37.　**胃がん細胞 MicroRNA による Cancer-Associated Fibroblast (CAF)遺伝子発現の網羅的解析**
～患者血清を用いた micro RNA U6 と 99b のリアルタイム RT-PCR による定量解析結果

若松 高太郎（東邦大学医療センター佐倉病院一般外科・消化器外科学講座）

Cancer Associated Fibroblast が分泌する MicroRNA（miRNA）の胃癌悪性形質への関与を解明するため、研究を開始。今回は約 1 年の研究成果を報告する。胃癌患者血清で miRNA の臨床的意義の解明と Real Time-PCR での定量解析を試みた。進行胃癌で miRNA 上昇していたが、定量測定誤差が大きいことが判明した。測定精度の向上にむけてさらなる、研究を継続している。

U.　大学院生研究発表

38. **耐糖能異常（IGT）から 2 型糖尿病への進展防止を目的とした実効性のある介入タイミングとその強度に対する検討**

奥山 ことば（社会環境医療系医療統計学）
指導教授：村上 義孝（社会医学講座医療統計学分野）

前糖尿病状態のうち耐糖能異常は 2 型糖尿病に進展しやすく、心血管イベントの独立因子であることも知られているが、介入タイミング及びその強度は必ずしも明確ではない。進展抑制を検討した複数の無作為化試験に対して、75g 糖負荷試験後の 2 時間血糖値を予測因子としたメタ回帰モデルに基づくと、耐糖能異常の初期段階から食事運動療法等による中程度の介入の必要性が示唆された。

39. EGFR 遺伝子変異陽性切除不能肺癌患者の予後規定因子の検討

高島 健太（代謝機能制御系糖尿病・代謝・内分泌学）
指導教授：齋木 厚人（内科学講座糖尿病・代謝・内分泌学分野）

上皮成長因子受容体(EGFR)遺伝子変異陽性肺がん患者の生命予後と、患者背景、遺伝子変異タイプ、治療薬との関連を明らかにするため、全生存期間との関連を Cox 比例ハザード分析で解析した。解析の結果 Osimertinib 投与歴が EGFR 遺伝子変異陽性肺がん患者の良好な生命予後と有意に関連していた。(HR: 0.467; 95%CI: 0.317-0.688; p<0.001)。

V.　研修医発表

40. **1 型糖尿病に合併した足壊疽の 1 例**

石島 正暉（研修医）
指導：山田 篤（総合診療内科）

重症 I 型糖尿病に合併した足壊疽の一例を経験した。足壊疽は一般的に血管障害によって引き起こされると考えていたが、末梢神経障害やそれに起因する解剖学的変化によって引き起こされることがわかった。重度の末梢神経障害があると発赤や熱感を認めない事や、視覚や感覚障害によって潰瘍の存在に気づかないことがあるので、糖尿病患者を診察する際には潰瘍のリスク管理の一環として知覚の低下や足の変形などに留意する必要がある。

41. **不明熱から高安動脈炎の診断となった症例**

三輪 雄大（研修医）
指導：小松 史哉（総合診療内科）

一ヶ月程続く発熱を主訴に来院された若年女性。サイトメガロウイルス IgM 抗体陽性であったことからサイトメガロウイルス感染症が疑われ経過観察となっていたが改善せず、精査加療目的に入院となった。CT において大動脈壁肥厚が見られ、頸動脈超音波検査では両総頸動脈のマカロニサイン陽性も認め高安動脈炎の診断とっなた。サイトメガロウイルス偽陽性が疑われる高安動脈炎症の一例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。

42. **繰り返す原因不明の急性腹症で鑑別力の重要性を再確認した一例**

髙野 雅嗣（研修医）
指導：繁田 知之（総合診療内科）

60 代の男性。受診１ヵ月前から腹部違和感を認め１週間前には左側腹部の間欠痛、３日前には刺されたような疼痛へ変化した。経過中に痛みの移動、下痢、血便、発熱は認めていない。数年来の便秘であるが、数日前から排便がない。嘔気は多少あるが、嘔吐はしていない。

前医で CT や上部消化管内視鏡を施行するも原因特定には至らず、精査目的で紹介受診された。2 年前にも同様の腹痛を呈したが、入院中自然軽快が得られている。

入院時現症としてバイタルは異常なく、腹部に反跳痛は認めなかった。採血では間接ビリルビンの上昇と貧血を認めるのみで、炎症反応の上昇は認められなかった。各種画像検査を施行するも明らかな異常所見は得られなかった。

43. **上腸間膜静脈血栓症の一例**

吉永 綾乃（研修医）
指導：小松 史哉（総合診療内科）

敗血症性ショックによる意識障害の状態で救急搬送された一例。搬送後は生活歴が特殊でありさまざまな感染源を有していたが、一因である上腸間膜静脈血栓症について考察した。

上腸間膜静脈血栓症は発症様式により経過や予後が異なり、早急に診断、治療が必要な場合がある。そのため、原因不明の感染、血栓傾向がある場合これも念頭に診断することが重要である。